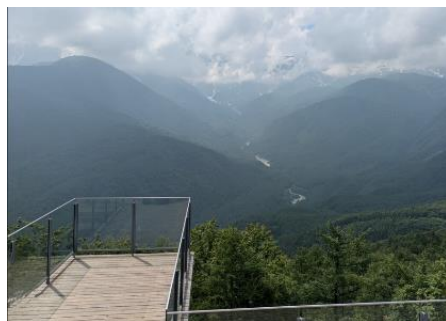
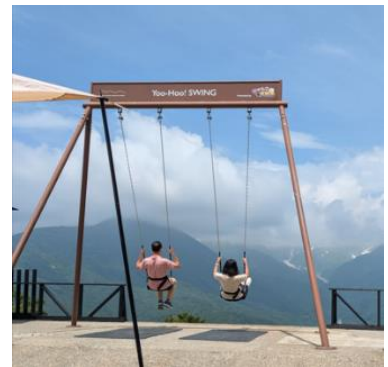


7月上旬に白馬に行った。「第2のニセコ」と呼ばれ、2025年の路線価が前年比32.4%増と2年連続路線価上昇率全国1位となった長野県白馬村である（白馬村は1平方メートル当たり4.9万円、ニセコ町は同73万円、日経新聞7月1日夕刊）。白馬村を旅行先に選んだ理由の一つは『スキー場は夏に儲けろ！誰も気づいていない「逆転ヒット」の法則』（和田寛、東洋経済新報社、2022年）の舞台を実際に見たかったからだ。『スキー場は夏に儲けろ！』は著者の和田氏が白馬の自然に魅せられ、外資系コンサルタント会社を退職して白馬に移住し、白馬岩岳マウンテンリゾートの経営者として冬だけでなく夏も儲ける「オールシーズン・マウンテンリゾート」を目指し従業員・仲間と泣き笑いしながら様々な改革を実行していく過程を紹介したものである。

「ヤッホー！スウィング」

白馬岩岳マウンテンリゾートを訪れ、日本初の「ヤッホー！スウィング」（アニメ「アルプスの少女ハイジ」主題歌が流れるなか北アルプスの絶景に飛び出す大型ブランコ）を体験した。導入時には利用料金を無料にするか1,000円にするかで議論があったらしいが「しっかりしたコンテンツを整備し、その対価をきちんといただく。そのお金をもとに次の仕掛けを展開」していくことが重要との決着をみて、現在は1回500円の利用料金となっている。ブランコをオープンすると全国キー局のほとんどが一度は取材に来るほどの人気を博し、混雑時には5時間待ちもあったそうだ。さらに、「絶景という隠れた資産を最大限に活かす」ために作られ



たおしゃれなカフェ併設の山頂展望施設マウンテンハーバー（通称「タイタニック」と呼ばれる絶景に突き出すテラス併設）や日本初のマウンテンカート（エンジンの付いていないカートで斜面コースを駆け下りるアクティビティ）を思う存分楽しんだ。

「マウンテンハーバー」の通称「タイタニック」

山を下りた後には、和田氏らが交渉を重ねて誘致した白馬駅から徒歩10分の「スノーピーク ランドステーション白馬」（隈研吾設計）を訪れ、「ああ、これがその」と設立に至るまでの過程に思いを馳せながら、おしゃれなランチを食した。

宿泊先ホテルのスタッフ曰く、「ニセコのパウダースノーには負けるが白馬の雪質は良く、天候はニセコより快晴が多い。

冬は成田から白馬まで直行バスが出る」とか。需要があれば供給があるのだと妙に感心した。

「スノーピーク ランドステーション白馬」



白馬村には白馬岩岳を含め、白馬八方尾根など 10 スキー場があり、リフトの共通自動改札システムを導入し「白馬バレー」「日本最大のスキー場」として地域全体でスキー客への利便性向上を図り、外国人観光客へ周知広告しているという。

白馬村の 2024-25 年冬期シーズン観光客数は 130 万人と過去最高を記録し（国別ではオーストラリア、香港、台湾、米国の順に多い）、令和 2 年の産業別就業者数では 79.3%が第 3 次産業に従事している（白馬村「第 1 回観光地経営会議」2025 年 6 月資料）。

実際に訪れてみると、飲食店・トイレなどで英語、中国語、韓国語等、外国語表記を多く見かけたものの夏だったせいか外国人観光客自体は京都ほど多くなかった。建築工事もそこかしこまではいかず、のどかな田園風景のなかでにたまに目を引く大型建築物・工事現場がある程度だった。また、白馬岩岳マウンテンリゾートの成功体験が近隣に浸透したせいか、おしゃれなカフェやテラスは八方尾根や青木湖にもあり、観光客で賑わうとともに若い人達の雇用を多く生んでいるようにみえた。

白馬八方尾根から望む北アルプス

それでは白馬村は、インバウンドの増加により経済的に潤い、人口が増え、過疎化にストップがかかっているのだろうか。現実はその単純ではないようだ。白馬村人口は 2000 年 9,492 人をピークに減り続け、2025 年 7 月 1 日現在 8,381 人と、この 25 年間で 1,100 人（1 割）以上減少している。また、白馬村の 2023 年度の財政力指数は 0.417 と決して財政的に豊かとはいえない（白馬村監査委員「令和 5 年度決算審査意見書」）。



その一方で、インバウンド増加は移動ニーズや夕食場所、道路等の混雑、文化や意識の違いから生じる課題など、行政対応が求められるものも多いようだ。白馬村ではこれら課題に対応する財源として 2026 年 6 月から宿泊税の導入を予定しているという。

白馬八方尾根からのパラグライダー飛行体験



白馬駅までは東京新宿駅から JR 特急あずさ号に乗って直通 3 時間半で行ける。このアクセスの良さと白馬駅から車でほぼ 10 分圏内に多くのスキー場が立地し日帰り温泉施設も多いことは日本人観光客にとっても魅力的である。高齢者がリフトに乗るだけでトレッキングせずとも登山気分を味わえるほか、川のラフティングやシャワーウォーキング、カヌー、熱気球、パラグライダー体験など夏のアクティビティも多い。特に 5 月～6 月上旬の新緑は素晴らしいそうだが紅葉シーズンの眺めも格別だという。地方創生・賑

わい創出、過疎化からの脱却に汗をかいている人々の思いを肌で感じながら旅行するのも良いと感じた。スキーが出来ない身としては、グリーンシーズンに毎年訪れ、今後、白馬村がどのように変わっていくかを見てみたいと強く思った旅行だった。